

## 今月のみことば 2017年12月

**「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」**

**(ヨハネの福音書1章14節)**

「受肉」という、聞きなれないことばがある。英語で言えば Incarnation。これは神が人間の肉体をとってこの世に生まれ、歴史を B.C.(紀元前)と A.D.(西暦)に分割した歴史的事実を示すことばである。

私たち日本人にとって、神が人間のかたちをとって来られるということを理解するのは難しくはない。日本の神々は天照大神や、スサノオノミコのように極めて人間に近い存在であるからだ。しかし、聖書でいう「神」とは、唯一の創造者、すなわち全宇宙を、また人間を、そして時間と空間をも造られた存在であることを知ると、その神が人間となられた、という事実の意味は計り知れず大きい。

クリスマスの意味もまたここにある。

それは、単なるキリスト教の祝祭のひとつではない。どの国の人にも、またどの文化の人にも、さらに言えば、どの宗教を信じる人にも、無神論者にも関係のある出来事なのである。

それでは、人となられた神はどのようにして来られたのか。

ルカの福音書の描写は一見牧歌的である。

救い主(メシア)として生まれた赤子を、そこにあった布にくるみ、飼い葉桶に寝かせる場面、また夜番をする羊飼いたちに御使いとその軍勢が現れ、夜空を明るく照らし、救い主の降誕を伝えた場面などである。



一方マタイの福音書によれば、その後、東方から来た博士たちがベツレヘムの幼子のもとに来て、黄金、乳香、没薬という捧げものをした、と書かれている。

ところが、平和そのものに見えるこのクリスマス・ストーリーにはもっと奥深い意味がある。

その一つは、「羊飼い」が不浄の仕事とみなされ、神殿に来ることさえ許されていなかった、ということだ。その羊飼いたちに御使いが真っ先にメシアの降誕を告げ知らせた、というのは世の常識をくつがえすことであった。自称義人ではなく、自らの罪、汚れを知る者に神は近いのである。

第二に、メシアである赤子をくるんだ布は、死者をくるむ布のことで、普段は家畜のいる場所に保管されていた。人の居住空間に置くには「縁起が悪い」と思われたからであろう。この布は十字架刑の後、布にくるまれるキリストを予見させている。葬り用の布に赤子をくるむほかなかったマリアとヨセフはどれほど情けない思いをしたことであろうか。しかし、そこにはキリストの十字架の死という預言的な意味があったのである。



第三に、博士たちの贈り物の中に、誕生祝いとして到底ふさわしいとは思えないものがある。没薬である。大変高価ではあるが、その主なる用途は腐敗を防ぐために死者に塗ることであった。このように、メシアの誕生は、喜ばしいだけではなく死を予感させるものでもあったのだ。

クリスマスとは何か。それは御子なる神が人となって、私たちの不始末(罪)を引き受け、身代わりとなって死んでくださり、私たちが父なる神と和睦する道を開いてくださった、という壮大な救いの物語の始まりにほかならない。